

令和元年6月25日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16705

研究課題名(和文)現代アメリカ演劇における「マスキュリティ」と「老い」

研究課題名(英文)"Masculinity and Aging" in American Drama

研究代表者

森本 道孝 (MORIMOTO, MICHITAKA)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：90581182

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：「老い」と向き合う姿勢は、文学作品のテーマに取り上げられることが多いにもかかわらず、アメリカ文学研究では体系的に分析をされてこなかった。この問題は、役者の身体による演技を前提とする演劇ジャンルにおいて、「記憶」の衰えなどの身体的減退という観点から考察することが最も有効であり、本研究では、マスキュリティに対する男性同士の過剰な意識を、「老い」への恐怖を解消する「アンチ・エイジング」意識の表出として様々な作家・作品の分析を通じて、多面的に捉え直すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

主として女性に見られる傾向とされてきたアンチ・エイジング願望を、アメリカの白人男性たちのマッチョ化志向の中に読み込み、加えて、「身体」という「老い」を実感させる減退の兆候が最も顕著に現れるものを駆使して表現するジャンルでありながら、それを正面から分析してこなかったアメリカ演劇の世界に、その根拠を求めるといふ試みであり、現代社会における重要な懸念事項に対する問題提起を行うことができた。

研究成果の概要(英文)：Although our attitude toward aging is taken up as the theme in literary works, we cannot find any systematic analysis of this theme in the field of American literature. It is the most useful way to examine the physical decline of actors such as the decline in our memory in the drama genre. In this study, we can reconsider the situation of male characters who think too much about masculinity as the appearance of "Anti-aging" orientation for dissolving the fear of aging.

研究分野：英米文学

キーワード：アメリカ演劇 Sam Shepard アンチエイジング マスキュリティ 英米文学 老いと医療

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

世界的に高齢者社会への危機感は切実であり、中でも「老い」と向き合う姿勢は、文学作品のテーマに取り上げられることが多いにもかかわらず、アメリカ文学研究では体系的に分析をされてこなかった。特に、この「老い」という身体にかかわる問題は、役者の身体による演技を前提とする演劇ジャンルにおいて、「記憶」の衰えなどの身体的減退という観点から考察することが最も有効であるが、この観点からの分析もなかった。

2. 研究の目的

申請時までに、申請者は、現代アメリカ演劇を代表する白人男性作家 Sam Shepard の作品群に見られる、互いの存在を嫌悪・反発し合いながらも相互に依存し合うという、一見すると矛盾を孕む感情を前景化する父親と息子の関係性を中心に、アメリカの白人男性のマスキュリティ意識についての分析をしてきた。このようにアメリカ演劇では、男同士の関わりの中で浮上する葛藤への防御手段として身体の「マッチョ」化がしばしば見られるため、マスキュリティに対する彼らの過剰な意識を、「老い」への恐怖を解消する「アンチ・エイジング」意識の表出として多面的に捉え直すことを、本研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) この過剰に意識し合う男たちの関係性についてのそれまでの分析を発展的に拡大させ、アメリカ演劇作品の中で若者の台頭や世代交代の宿命への恐怖心に、父親世代が何らかの形で抵抗を試みていることを、時間軸に基づく流れの中で誰もが体験せざるを得ない「老い(エイジング)」への抵抗、つまり彼らなりの「アンチ・エイジング」志向の表出であると解釈する。このような男性の「アンチ・エイジング」志向は、若者世代と対等に張り合うために一様にマッチョ化を目指すという「対峙(若返り)型」と、「老い」への恐怖心から老いといううちに「自殺」するという「逃避(諦め)型」のいずれかの形で表出するという、オリジナルな分析を展開した。

(2) さらに、「老い」を基軸として、さまざまな人種の男性にも目を配り、その類似点や相違点の詳細な分析を経て、人種という観点から研究範囲を発展的に拡大した。また、生物学的分類において「男性/女性」という区分そのものに揺らぎを与える存在として男性同性愛者をはじめとする「クエア」にも目を向け、ジェンダーの観点からの分析も加えた。

(3) 海外出張として、New York Public Library において、アメリカ演劇に関する文献や映像資料の調査を丹念に行った。また、演劇研究ということで、ブロードウェイにおいて最新のミュージカルや演劇の上演に関する情報収集、現地調査も併せて行った。マスキュリティ表象にかかわる情報収集もニューヨークやハワイにおいて、その違いの検証を順次行った。

4. 研究成果

「老い」と向き合う姿勢は、文学作品のテーマに取り上げられることが多いにもかかわらず、アメリカ文学研究では体系的に分析をされてこなかった。この問題は、役者の身体による演技を前提とする演劇ジャンルにおいて、「記憶」の衰えなどの身体的減退という観点から考察することが最も有効であり、本研究では、マスキュリティに対する男性同士の過剰な意識を、「老い」への恐怖を解消する「アンチ・エイジング」意識の表出として様々な作家・作品の分析を通じて、多面的に捉え直すことができた。

(1) 現代アメリカ演劇に描写される「マスキュリティ」と「老い」の研究を進めるにあたって、申請時までの主な研究対象であった男性演劇作家サム・シェパードの作品に見られる世代交代への恐怖にかかわる考察を本研究のスタートとした。特に初期作品群に見られる作家自身の若い時代と密接にかかわるロック音楽への傾倒と、自身の「老い」が進むに従ってその音楽ジャンルとのギャップに苦しみつつもしがみつかざるを得ない苦境の様子を、一種の「アンチ・エイジング志向」の表出として読み直すことができた。日本アメリカ演劇学会第5回全国大会におけるこの作家に関するシンポジウム「メディアミックスの観点から読み解く Sam Shepard」において、「抵抗のロック音楽 Sam Shepard 作品に見るアンチ・エイジング志向」というタイトルでその成果を発表した。また、同シンポジウムでは、司会を務め、シェパードにかかわる様々な観点の討論を取りまとめた。さらに、この内容は同じタイトルで2018年に『待兼山論叢第52号 文学篇』に論文の形で投稿し、掲載された。

(2) 同年には、同作家の移動にかかわる経歴とリンクさせる形で、複数の作品を論じた論文 *Osaka Literary Review* 第54巻に論文「サム・シェパードの流浪と停止 『本物の西部』、『ファー・ノース』を中心に」を投稿し、掲載された。移動する中で男性登場人物たちにどのような変化が見られるのか、成長・さらには老いていく中でどのような描写が出てくるのかを考察した。

(3) 『阪大英文学会叢書第8号 英語のデザインを読む』に、論文「歴史の「再」デザイン スーザン＝ロリ・パークス劇のスタイル」を投稿し、掲載された。新進気鋭のアフロアメリカンの女性劇作家であるパークスの劇をその独自のセリフスタイルと、

演出構成に着目して分析を行った。語られてきた歴史という「過去」に以下に向かうかという姿勢の分析から、人種やエスニシティの違いを超えて、「過去」に向かい視線、「エイジング」の動きに逆らう動作を考察することができた。

- (4) 2016年には、日本アメリカ演劇学会の機関誌『アメリカ演劇 28・29号 サム・シェパード特集 エスニック・マイノリティ演劇特集』において、シェパードの経歴をまとめた年表を作成し、掲載された。
- (5) 日本アメリカ演劇学会第8回全国大会において、シンポジウム「Edward Albeeの詩学」のパネリストとして、「つぎはぎの声 Edward Albee 作品に見る生と死を奏でる音楽の効果」というタイトルで発表を行った。オールビーが描く作品の中に登場する音楽や声の効果について、分析を行った、そこには人物の生と死にまつわる考え方との連動を見て取ることができた。
- (6) 阪大英文学会第51回大会において、「加齢と孤独 Sam Shepardの *Heartless* (2012)を中心に」というタイトルで発表を行った。シェパードの後期の作品には、彼自身の「古い」の次期を密接にリンクするように老いた男の悲哀が非常に色濃く見られる。若い女性人物と対比されることにより、その悲哀がますます顕著に描き出されていることを作品の中から考察した。
- (7) アンチ・エイジングと医療にかかわる観点から、「カットと英米文学」というテーマでの研究に接続を進めた。スーザン＝ロリ・パークスの『ヴィーナス』という作品に出得てくる、死後医療解剖される黒人女性の姿や、そこにはらむ権力構造などを引き続き分析中であり、近く論文の形で成果を発表する予定である。これも、アンチ・エイジングとアメリカ演劇という観点への着目から派生した研究の成果と言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

森本道孝、「抵抗のロック音楽 Sam Shepard 作品に見るアンチ・エイジング志向」、『待兼山論叢第52号 文学篇』、査読あり、2018年、pp.17-37。

森本道孝、Sam Shepard 年表、『アメリカ演劇 28・29号 サム・シェパード特集 エスニック・マイノリティ演劇特集』、査読無し、法政大学出版局、2017年、pp.58-67。

森本道孝、「歴史の「再」デザイン スーザン＝ロリ・パークス劇のスタイル」、『阪大英文学会叢書第8号 英語のデザインを読む』、英宝社、2015年、pp.217-228。

森本道孝、「サム・シェパードの流浪と停止 『本物の西部』、『ファー・ノース』を中心に」、『Osaka Literary Review 第54巻』、査読あり、2015年、pp.35-49。

〔学会発表〕(計 3 件)

森本道孝、「加齢と孤独 Sam Shepardの *Heartless* (2012)を中心に」、『阪大英文学会第51回大会(於：大阪大学) 2018年10月27日。』

森本道孝、「つぎはぎの声 Edward Albee 作品に見る生と死を奏でる音楽の効果」、『シンポジウム「Edward Albeeの詩学」』、日本アメリカ演劇学会第8回全国大会(於：Hotel ルブラ王山) 2018年8月26日。

森本道孝、「抵抗のロック音楽 Sam Shepard 作品に見るアンチ・エイジング志向」、『シンポジウム「メディアミックスの観点から読み解く Sam Shepard」』、日本アメリカ演劇学会第5回全国大会(於：大阪ガーデンパレス) 2015年9月13日。

〔図書〕(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。